

令和6年度岐阜県合同輸血療法委員会 議事要旨

1 日 時 令和7年2月21日（金） 13：30～15：00

2 場 所 岐阜県赤十字血液センター 3階会議室

3 出席者

所 属	役職	氏名	備考
一般社団法人岐阜県医師会	理 事	西野 好則	【副委員長】
一般社団法人岐阜県薬剤師会	副会長	鈴木 昭夫	
一般社団法人岐阜県臨床検査技師会	輸血部門長	森本 剛史	
国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学医学部附属病院	輸血部長	清水 雅仁	
大垣市民病院	血液内科部長	小杉 浩史	【委員長】 【専門部会長】
岐阜市民病院	輸血部長	北川 順一	
独立行政法人岐阜県立多治見病院	副院長兼 血液内科部長	小澤 幸泰	
社会医療法人蘇西厚生会 松波総合病院	病院長代理	鶴見 寿	
岐阜県厚生農業協同組合連合会 中濃厚生病院	血液内科部長	後藤 英子	
岐阜県赤十字血液センター	所 長	高橋 健	

【委員会事務局】

所 属	役職及び氏名	
岐阜県健康福祉部薬務水道課	献血運動推進監	中丸 慶彦
	技術主査	林 小夏
	主任技師	加藤 大和

【専門部会事務局】

所 属	役職及び氏名	
岐阜県赤十字血液センター	事業部長	岩崎 秀一
	学術情報・供給課長	志知 俊
	学術係長	和田 美奈

4 次 第

(1) あいさつ

(2) 議題

ア 令和6年度事業報告について

イ 令和7年度事業計画（案）について

(3) 報告

ア 令和6年度献血推進等事業の概要について

イ 令和6年度献血の実績について

ウ 令和6年血液製剤の供給の実績について

5 議事要旨

冒頭、薬務水道課中丸献血運動推進監からあいさつを行った。

岐阜県合同輸血療法委員会小杉委員長からあいさつを行った。

岐阜県合同輸血療法委員会設置要綱第4条第3項及び第4項の規定に基づき、議長は西野副委員長が代理となり議事を進行した。

議題 ア 令和6年度事業報告について

小杉専門部会長及び各WGリーダーから資料に基づき説明を行った。

(説明概要)

令和6年度は、「中小規模病院における血液製剤の使用実態の把握と解析を活用した適正化方策事業の展開」というテーマで、厚生労働省の血液製剤使用適正化方策調査研究事業に採択された。今回は、WG1で実施している岐阜県調査アンケートの解析に加え、WG4でも小規模病院に対し、同一のアンケート調査を実施した。今回の調査により、臨床輸血看護師や学会認定検査技師の配置による輸血療法委員会、チーム医療体制の確保、製剤発注の一定の基準の整備、診療科別統計を含む使用状況のモニタリングと施設内輸血療法委員会での対策立案、異型O型製剤の活用や緊急輸血体制の整備などが血液製剤の廃棄率低減あるいは適正化推進に寄与すると考えられた。

この他、WG1では、岐阜県調査と学会全国調査の突合解析を行った。また、各医療機関におけるI&A自己評価結果を取りまとめた。毎年、各医療機関を視察している中で、自己評価としては「できている」との回答が多くなってきていることがわかる。

WG2では、中規模病院の適正化推進スコアと廃棄率の解析において、改善を見いだせた。また、2施設の輸血療法委員会へ訪問し、2施設の輸血療法委員会から岐阜県合同輸血療法委員会専門部会へ招聘参加を実現できた。この他、情報交換の場の形成として、薬剤師研修会をハイブリッド方式で開催し、すべての二次医療圏からほぼ過去最大数の参加をいただけた。輸血認定看護師活動では、看護師会合、業務アンケート調査を実施し、輸血に関する知識の理解度の現状等を把握することができた。

WG 3では、現地開催でモデル的病院の相互視察研修を実施することができた。また、3つのテーマについてe-learning教材を拡充することができた。

WG 4では、血液製剤使用実績のある病院へ、岐阜県調査と同一の詳細なアンケート調査を実施した。調査の結果、輸血に対する専任の医師が配置されていないなど病床規模に応じた人員体制等に課題があると考えられた。

WG 5では、専門部会NEWSを発行した。各施設輸血療法委員会、岐阜県合同輸血療法委員会活動からの提供情報を共有し、自施設での改善に必要な情報として活用いただきたい。Vol.2は本委員会終了後に発行される。

WG 6では、岐阜県の認定検査技師数のモニタリング、教育活動や輸血技師ネットワーク相談支援活動を行った。病床数当たりの認定検査技師数で過去には最高で9位であったものが、近年低下してきたことから、世代交代への準備対応を急ぐ必要がある。これまでの専門部会活動等での認定技師試験の受験勧奨により、中小規模病院においても受験希望者が増えてきたため、今後さらなるバックアップをしていく。

WG 7では、輸血に関する企業主催の輸血医療に関する学術講演会を通じて情報発信できた。専門部会会員による学会報告などの活動も、Web・現地参加を行い、県内の取り組みについて発表を行った。

WG 8では、新規の標準ツールの作成は必要なかった。今後も国の指針改正などに伴って必要と思われる標準ツールが見出されれば、作成提供を行う。

専門部会活動の今後への提言として、

- ① 一部の廃棄率目標未達成が持続している一部の中小規模病院への支援を、引き続き強化・拡充する必要がある。
- ② 専門性資格保有者の活用と拡充が重要である。(強化)
- ③ 開発・教育・研修・監査体制の構築により自律的に適正化推進が可能となるまで相談支援を強化する。
- ④ 引き続き、モデル的施設としてのI&A認証施設を確保する。(来年度大規模病院2施設予定)
- ⑤ 各種研修会、e-learning研修のツールの拡充をはかる。(強化)

<小杉委員長>

WG 6の専門資格保有者について、森本先生ご意見いかがか。

<森本委員>

認定臨床検査技師の状況であるが、現状維持にようやく戻った形である。飛騨地域が0名であったが、ここ数年の啓発の活動の結果、次年度に3名受験することとなっている。

合格率の低い試験ではあるが、粘り強く挑戦していただければ必ず合格できると思っているので、期待したいと思っている。

<小杉委員長>

WG 2の薬剤師会の活動について、鈴木先生ご意見いかがか。

<鈴木委員>

今年度の薬剤師研修会は、岐阜県病院薬剤師会と共催で開催することで、研修単位を得られるようにしたところ、40名近く参加いただけた。今後もすべての医療圏から参加いただける体制にしていきたい。

<小杉委員長>

この他専門部会活動についてご意見はあるか。

<清水委員>

薬剤師、臨床輸血看護師や認定検査技師が研修を受け、資格を得ることにより何らかの加算や病院の機能評価に影響する等のメリットがあれば、病院管理者や医療安全に関わる方に働きかけることが重要であると考えているが、いかがか。

<小杉委員長>

認定資格保有者の配置があるということでの加算は現状ないが、数年前から議論されている。また、輸血機能評価認証制度を通過していると、病院機能評価における輸血に関する項目は、高く評価されることが、一昨年度から病院機能評価解説集へ記載が追加されている。輸血に関する体制整備は徐々に強化されつつあるため、いずれは加算等も実現される可能性がある。

<小杉委員長>

その他にご意見はないか。

ご意見もないようなので、こちらの専門部会報告を委員会報告書としてまとめ、今年度、国の血液製剤使用適正化方策調査研究事業に提出させていただくこととして、よろしいか。

(委員が賛同する。)

議題 イ 令和7年度事業計画(案)について

事務局加藤主任技師から資料に基づき説明を行った。

(説明概要)

令和7年度は、令和6年度同様、岐阜県合同輸血療法委員会の活動方針を基本に事業を推進していく。具体的な事業計画及び専門部会活動内容については、令和6年度と同じとする。

<西野副委員長>

令和7年度事業計画(案)についてご意見はあるか。

(意見なし)

<西野副委員長>

ご意見もないようなので、令和7年度事業計画は、案のとおり活動を進めていく。

報告 ア 令和6年度献血推進等事業の概要について

イ 令和6年度献血の実績について

委員会事務局加藤主任技師から資料に基づき説明を行った。

(説明概要)

令和6年度岐阜県献血推進計画に基づき、岐阜県、市町村及び岐阜県赤十字血液センターが実施した事業について説明。

令和6年度の献血の現況は、12月までの実績で献血者数及び献血量ともに目標値を若干下回った。年代別の献血者数では、これまで減少し続けてきた若年層の献血者数が、令和5年度にわずかに増加し、10代の献血者数が増加している。

次年度も若年層向け献血啓発事業「未来へつなぐ献血プロジェクトぎふ」による献血啓発に取り組んでいく。

<西野副委員長>

若年層の献血者数が増えてきているようであるが、若年層に対する取り組みの成果について、高橋先生ご意見はいかがか。

<高橋委員>

岐阜県で第60回献血運動推進全国大会があったため、大会を契機として県や各分野の支援団体の皆様とともに活動したことで、10代の献血者数が増えた。若年層の新規献血者が減っているの、今後は10代の献血者を10年間増やし続けようと考えている。若年層の献血者数を増やしていくためには、各医療機関や各団体の御理解が必要不可欠であるので、引き続き協力をお願いしたい。

報告 ウ 令和6年血液製剤の供給の実績について

専門部会事務局 志知課長から資料に基づき説明を行った。

(説明概要)

岐阜県内の医療機関への赤血球製剤の供給は対前年比で99%、FFPは110%、血小板製剤は92%である。医療機関に供給された赤血球製剤の構成比としては95.4%が、400mL製剤である。

人口千人あたりに占める全血献血者数の割合、赤血球製剤供給単位数の割合は、令和4年度までは増加傾向にあったが、以降は横ばいである。

岐阜県内輸血用血液製剤供給実績上位30医療機関における移動採血車の献血実績については資料とおりである。引き続き、各医療機関での献血の協力をお願いしたい。

<西野副委員長>

全体を通して、北川先生何かご意見はあるか。

<北川委員>

200mL献血が思ったよりも増えていないが、若年層の献血者数が増えてきているようである。若年層に対し、こういったアピールが一番効果的であったか。

<高橋委員>

以前は400mL献血率を上げようとしていたが、若年層の献血者を増やすために、現在は、200mL献血もできるようにしたため、若年層の200mL献血率も増加した。

また、岐阜献血ルームアクティブGで、初回献血者に対して、献血をしたきっかけについてアンケートしたところ、友達に誘われたという回答が1番であった。友達同士で献血へ行きやすい雰囲気大切だと考えているため、教育委員会とも相談して、各高校に協力をお願いし、若年層の献血者数を増やそうと考えている。

<北川委員>

献血バスを配車するときは、400mL献血しかできないといって配車するのか、200mL献血と400mL献血のどちらもできるといって配車するのか。

<高橋委員>

200mL献血と400mL献血のどちらでもよいとすると、若年層ではない年齢で、体重の軽い方が200mL献血を希望されることもあり、多くの献血バスでは400mL限定会場としている。岐阜献血ルームアクティブGや高校献血では、高校生に献血を経験していただく目的があり、200mL献血をできるようにしている。

<西野副委員長>

その他ご意見はあるか。

意見ないようであれば、本日の議事を終了いたします。

最後に、岐阜県赤十字血液センター高橋所長より閉会のあいさつをしていただき、委員会を終了した。